

自己評価報告書

平成23年4月25日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20330029

研究課題名（和文） 人間、国民、市民—市民社会、ナショナリズム、グローバリズムと新しい政治理論

研究課題名（英文） Humanity, Nationality, Citizenship: Nationalism, Globalism and New Political Theories

研究代表者

岡本 仁宏 (OKAMOTO MASAHIRO)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：20169155

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：市民、国民、市民社会、ナショナリズム、グローバリズム、シティズンシップ、政治主体、政治学

1. 研究計画の概要

20世紀末、冷戦後の世界において、多くの人びとが感じている世界秩序の安定感の喪失は、我々の政治理論・社会理論が動揺する世界秩序を把握する言葉や構想を持ちえていないことに対応している。本研究の全体的構想は、近代政治理論において継承された政治主体の基本用語の可能性と限界を追求し、我々の状況を把握し切り開く新しい言葉を構築することを目的としている。

具体的には、第一に、「人間、国民、市民」（ヒューマニティ、ナショナルティ、シティズンシップ）という基幹の主体用語を中心に、これらの主体用語を、「市民社会、ナショナリズム、グローバリズム」という三つの政治思想との関連において取り上げる。第二に、政治理論のレリヴァンスに注意を払い、理論的革新とともに、今を生きる人びとの苦しみや惑いに答える政治理論の可能性を探求する。従来の理論の弥縫策的対応ではなく、新しい言葉とそのための理論的展望が必要である。

このために、13人の中堅・若手の政治（理論）研究者が、意識的に新しい理論構築に焦点を当て集中的に基本概念の検討を行い、その成果として政治理論叢書を刊行・完結させ、日本の学界では少ない批評・反論を含めた対論形式を含む著作を刊行する。また、日本政治学会、及び世界政治学会でのセッション形成、国際会議およびシンポジウムを行なう。

2. 研究の進捗状況

(1) 現時点までに、毎年ほぼ2回、3年間で合計5回のインテンシブな研究合宿とその他の打ち合わせ会議を開催し、多彩なゲス

ト・スピーカーを招聘し、共同研究を進捗させてきた。

共同研究者の研究上の問題関心は、エコロジーの政治学やアリストテレス政治学、さらに古代市民論や世界連邦論に至るまで広範囲にわたっており相互の問題関心の交流と、それにもとづく活発な議論が行われてきた。

ゲストとしては、これまでに、大澤真幸、岡部一明、大竹弘二、立岩真也、遠藤比呂通の各氏を招聘した。これらのゲスト、及び共同研究者の研究報告も、ナショナリズムの主体、主体としての市民と非市民、平和構築（戦争）の主体など、それぞれの年度に一定の重点を置きつつ、研究がおこなわれてきた。

(2) 合宿に合わせて、釜ヶ崎及び浜松での現地ツアーも行い、政治思想・理論研究の営みに対する実践的問題関心の刺激の機会も設けた（現地弁護士をゲストとして招聘も行う）。

(3) この過程において、下記のように、研究成果が順次公表・出版されてきており、研究成果の創出・発表状況としては、妥当な進展状況であるといえることができる。なお、当初より最終年度での著作発行を予定しており、その点の準備が進行している、といえることができる。

(4) 学会関係では、日本政治学会でのセッション形成を行った。世界政治学会でのセッションについては、果たせていない。ただし、共同研究者による国際学会での発表は行われており、研究成果は国際的にも発表されている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

全体としての共同研究は、非常に活発に行われており、かつ研究成果も順調に発表されており、その点ではおおむね順調であると言える。

ただし、第一に、当初予定の「政治理論叢書を刊行・完結」の進展を図るという点において、発表状況が不十分であり、この点で「おおむね」順調、という達成度の評価を行っている。また、第二に、東北大震災の影響で共同研究の進展に若干の支障が出ている。

とはいえ、最初に記載したように、共同研究自体の実質的進展と着実な研究成果の発表があるという点でおおむね「順調」であると評価できる。

4. 今後の研究の推進方策

第一に、当初予定の「政治理論叢書を刊行・完結」の進展を図ることが第一の課題である。この点では、年度の早い時期に執筆予定者に、この点での執筆計画を再確認することが必要であり、実際にすでにこの作業に着手しつつある。

第二に、国際シンポジウムの開催という点においては、最終年度後半を予定していたが、現時点において、すでに東北大震災の影響があり今後の研究交流において障害があることが予想されており、この点についての準備が必要となっている。

第三に、「批評・反論を含めた対論形式を含む著作」の刊行については、最終年度報告書をそのような形式で刊行することを目指しており、さらに今年度出版助成を得ることができれば、その内容を出版する計画を立てている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 27 件)

①荒木勝「アリストテレス政治哲学研究の諸前提」岡山大学『法学会雑誌』59 巻 2010, pp. 33-81 査読無。

②山崎望「世界秩序の構造変動と来るべき民主主義 (1,2,3,4・完)」駒澤法学第 9 巻第 1 号 2009, pp.1-42;駒澤法学第 9 巻第 2 号 2009, pp.43-59;駒澤大学法学部研究紀要第 68 号 2010, pp.1-25;駒澤法学第 10 巻第 2 号 2010, pp.67-140 査読無。

③的射場敬一「古代ローマにおける「市民」と「市民権」」国士舘大学政治研究 1 2010, pp.97-116 査読無。

④寺島俊徳「市民活動とシティズンシップ」『関西大学法学論集』第 58 巻第 6 号 2009, pp.1-52 査読無。

⑤木部尚志「平等主義的正義への関係論的アプローチ---〈運の平等主義〉の批判的考察を手がかりに」『思想』1012 号 2008, pp.61-80 査読有。

[学会発表] (計 16 件)

①木部尚志“Immigration and Integration Policies in Japan: Immigrants, the Welfare State, and the Labor Market.” EU-Japan Conference, 2009 年 11 月 29 日 Institut d' études européennes, Brussels(Belgium).

②山田竜作「グローバル・シティズンシップ?---その議論の諸次元をめぐって」日本政治学会、2009 年 10 月 11 日、日本大学。

③的射場敬一「シティズンシップの歴史的展開」日本政治学会、2009 年 10 月 11 日、日本大学。

④ Masao Kikuchi "The Receptivity of Liberalism and the Limits of Justice and Contemporary Communitarianism in Japan" Public Philosophies in the Golden Age: Dialogue with Professor Michael Sandel, 2009 年 3 月 20 日、千葉大学。

⑤岡本仁宏「日本の福祉における NPO・NGO の役割と課題」日本政治学会日本政治学会研究大会国際シンポジウム、2008 年 10 月 12 日、関西学院大学。

[図書] (計 34 件)

①古賀敬太『政治思想の源流---ヘレニズムとヘブライズム』風行社、2010、pp.293。

② Masatsugu Maruyama, "Evaluating Japanese Agricultural Policy from An Eco-socialist Perspective" in Qingzhi Huan (ed.),Eco-socialism as Politics: Rebuilding the Basis of Our Modern Civilisation, Springer, 2010, pp.151-162.

③千葉眞『「未完の革命」としての平和憲法』岩波書店 2009, pp.262。

④富沢克「グローバル時代のナショナリティ---リベラリズムとの関連において」富沢克・力久昌幸編『グローバル時代の法と政治---世界・国家・地方』成文堂、2009、pp.197-217。

⑤杉田敦『政治への想像力』岩波書店、2009, pp.258。

⑥Shin Chiba, "Constitutional Pacifism in Post-war Japan," Shin Chiba and Thomas J. Schoenbaum, eds. *Peace Movements and Pacifism after September 11*, Cheltenham, UK and Northampton, MA, USA: Edward Elgar, pp.128-151. 2008.